

Luz y sombra de la Edad Media:
manuscritos iluminados en la
Península Ibérica

中世の光と影 イベリア写本の愉しみ 展示資料解説



2024年6月7日（金）～7月12日（金）
東京外国語大学附属図書館2Fギャラリー

中世の光と影 イベリア写本の愉しみ 展示資料解説

展示期間：2024年6月7日（金）～7月12日（金）

展示場所：東京外国語大学附属図書館2Fギャラリー

主催：東京外国語大学附属図書館

JSPS科研費22K00955 中世イベリア世界の多文化共生再考

展示資料解説執筆担当：K.J.久米順子 / T.K. 瀧本佳容子

展示パネル執筆担当：K.J.久米順子 / T.K. 瀧本佳容子 / K.Y. 黒田祐我 / O.T. 押尾高志

ポスター・表紙図版出典：左上から右へ順に『レオン司教座聖堂寄進文書集成』；『フルゴスのサンティアゴ信徒会の書』；『バルセロナ・ハガダー』；同；リエバナのベアトゥス『黙示録註解』ウルジェイ本；ゴンサロ・デ・ベルセオ『シロスの聖ドミニクス伝』；リエバナのベアトゥス『黙示録註解』ラス・ウエルガス本；『バルセロナ・ハガダー』；リエバナのベアトゥス『黙示録註解』ラス・ウエルガス本



This work is licensed under CC BY-NC-ND 4.0

展示にあたって

本展では、東京外国語大学附属図書館および同大久米研究室の所蔵資料を中心に、中世のイベリア半島で制作された写本の世界を、ファクシミリ版やパネルを通して紹介します。今回の展示資料で用いられている言語は、ラテン語、中世のカスティーリャ語（スペイン語）、ヘブライ語です。多様な書体はいうまでもなく、時代や地域により異なる趣を見せる装飾・挿絵にもご注目ください。キリスト教、イスラーム、ユダヤ教という三宗教の接触が生んだ書物の文化を楽しんでいただけると幸いです。

本展開催にご尽力くださった東京外国語大学附属図書館、とりわけ学術情報課の皆様には感謝申し上げます。なお本展は、科研費「中世イベリア世界の多文化共生再考」による研究成果の一部です。

解説パネル執筆担当

T.K. 瀧本佳容子（慶應義塾大学）

K.Y. 黒田祐我（神奈川大学）

O.T. 押尾高志（西南学院大学）

K.J. 久米順子（東京外国語大学）

中世のイベリア半島

横軸で大西洋と地中海に挟まれ、縦軸でヨーロッパとアフリカとをつなぐ地理条件にあるイベリア半島は、常に「文化のるつぼ」であり続けました。中世での転機は、711年にもたらされます。この年以來、この半島は、キリスト教、イスラーム、そしてユダヤ教という、三つの宗教をそれぞれ信仰する人々が闘ぎあう舞台となりました。

これまでは「レコンキスタ（再征服運動）」の名のもとに、宗教的・軍事的対立の側面ばかりが過度に強調されてきました。しかし敵対意識、憎悪や偏見を互いに抱きながらも、これまで想像されてきた以上に、文化的には混淆状態となっていたのです。政治的な対立と、文化的な融和は、同時に起こりえたのです。

言語ではラテン語やロマンス諸語に加えて、アラビア語とヘブライ語が日常的に飛び交い、場合によっては「アルハミーア文書」のように、文字すら貸借関係にありました。建築でもムスリム職人の技術とヨーロッパ的建築モードが融合し、キリスト教徒の王族や貴族は、こぞってイスラーム世界で生み出された衣服や工芸品を用いました。そもそも民族的にも、バスク系住民を含む古代以来の人々と、ゲルマン系の西ゴート、そしてムスリムとして流入したアラブ人やベルベル人、そしてピレネー北から移住するヨーロッパ系住民とが混在する場であったのです。

中世のイベリア半島は、ヨーロッパでありながら、その枠には全くおさまらない場として、際立っていました。

写本とは、 ファクシミリ版とは

中世の西洋では、書物は、すべて人の手で書かれたり写されたりしました。

こうした写本（手稿本）は、羊や牛などの獣の皮をなめして作った獣皮紙（羊皮紙）に書かれています。丁寧に作られた獣皮紙は、紙よりも丈夫で、滲みにくく発色に優れ、文字が改竄されにくいといった特色があります。インクや顔料は鉱物・動植物・昆虫から、ペンは鳥の羽をナイフで削って、作られました。

したがって、写本はすべて一点物です。しかし現代になると、印刷技術の改良により、すぐれた複製品が制作されるようになりました。それを「ファクシミリ版」と呼びます。

良質なファクシミリ版では、顔料の上に載せられた金箔・金泥の厚み、獣皮紙の製造過程で空いた穴、欄外の書き込みや汚れ、手の込んだ表紙や装幀、破損箇所を縫いあげた補修跡までが、オリジナル写本に忠実に再現されています。そうしたファクシミリ版は、部数限定で製作される稀少なものなので、東京外国語大学附属図書館では貴重書室扱いとなっています。

本展の展示資料は、獣皮紙に似せるための特殊加工を施した紙、あるいは光沢紙に印刷されたファクシミリ版です。

1 『バルセロナ・ハガダー』

Barcelona Haggadah

オリジナル写本制作年：1340 年頃

制作地：バルセロナ

所蔵先：英国図書館 Ms. ADD. 14761

寸法、フォリオ数：255×190 mm, 161 葉 (322 ページ)

ファクシミリ版出版地、出版者、出版年：London, Facsimile Editions, 1992

所蔵先：東京外国語大学附属図書館 H6/199/732157

ハガダー写本とは、ユダヤ人のエジプトからの脱出・解放を記念し、大麦の収穫の始まりを祝う過越祭（ペサハ）で用いられる典礼書である。過越祭は、ユダヤ教のもっとも重要な祭日のひとつである。その初日の夕方、家族親戚が集う晚餐式（セデル）の前に、子どもが大人に「なぜ、今日の晩はほかの夜と違うの？」に始まる 4 つの問いを投げかける。それらの問いに答えるために、ハガダー写本が一同で輪読されて、ユダヤ人の歴史や習慣が子どもたちに伝えられた。ちなみにハガダー（複数形ハガドート）の原意は「語り」「語ること」である。

イベリア半島では、ハガダー写本は、13 世紀以降に独立した写本として作られるようになった。商業が発達し、富裕なユダヤ人が生まれたカタルーニャでは、出エジプトの物語や過越祭の準備の様子などを描いた挿絵や華やかな彩飾を施した豪華なハガダー写本が 14～15 世紀に多数、制作された。中世末のイベリア半島では、大型ヘブライ語聖書写本も複数作られたが、聖書写本では概して幾何学文様を中心とするイスラーム美術の装飾技法が好んで用いられたのに対して、ハガダー写本ではキリスト教美術の挿絵・彩飾技法が取り入れられた。本写本も、ヘブライ語の写字生と、キリスト教徒の挿絵師の共同作業により作られたものと考えられる。ただし、ヘブライ語はアラビア語写本と同じく右から左に読むため、ラテン語やカスティーリャ語写本とは反対側が表紙になり、また、挿絵も右から左に進行する。

本写本は、61 葉の彩飾にバルセロナ軍の盾に似た挿絵が含まれているところから、「バルセロナのハガダー」の名で呼ばれている。過越祭で用いられる狭義のハガダー部分の前に、過越祭直前の安息日で用いられる聖歌、巻末に別の聖歌や祈禱などを収める、複合的な構成の写本である。

本写本は、イベリア半島からユダヤ人が強制改宗ないし国外追放になった 1492 年以前に半島外へ持ち出されたようで、1459 年にエルサレムのユダヤ人シャロム・ラティフからボローニャのユダヤ人ラビ・モセス・ベン・アブラハムに 50 ダカットで売却されたとの記録が残る。その後、複数の所有者を経て、1844 年、英国図書館に購入された。

参考文献・サイト

- *The Barcelona Haggadah: British Library MS. ADD. 14761*, 2 vols., London, Facsimile Editions, 1992.
- Cohen, Evelyn M., "The Artist of the Barcelona Haggadah", *The Late Medieval Hebrew Book in the Western Mediterranean*, Leiden, Brill, 2015, pp. 249-265.

-Pujades i Bataller, Ramon J. et al., *Barcelona Haggadot. The Jewish Splendour of Catalan Gothic* (= *Hagadàs Barcelona: l'esplendor jueva del gòtic català*), Barcelona, Museu d'Història de Barcelona, 2015.

https://www.barcelona.cat/museuhistoria/sites/default/files/hagadas_eng_0.pdf

ハガダー写本一般、また中世イベリアのハガダー写本

-石川耕一郎『過越祭のハガダー』山本書店、1988年

-『ハガダー [過越し祭の式次第]』ヘブライ語原文+英語・日本語訳付、ミルトス、2003年

-Epstein, Marc Michael, *The Medieval Haggadah: Art, Narrative, and Religious Imagination*, New Haven, Yale University Press, 2011.

-Kogman-Appel, Katrin, *Illuminated Haggadot from Medieval Spain: Biblical Imagery and the Passover Holiday*, University Park, Pennsylvania State University Press, 2006.

-Kogman-Appel, Katrin, "Jewish Art and Cultural Exchange: Theoretical Perspectives", *Medieval Encounters*, 17 (2011), pp. 1-26.

(K.J.)



『バルセロナ・ハガダー』 ff. 25r-24v

2 『レオン司教座聖堂寄進文書集成』

Libro de las Estampas de la Catedral de León

オリジナル写本制作年：1200 年頃

制作地：レオン

所蔵先：レオン司教座聖堂, ms. 25

寸法、フォリオ数：253×166 mm, 44 葉

ファクシミリ版出版地、出版者、出版年：León, Universidad de León, 1997

所蔵先：東京外国語大学久米研究室

この写本は、アストゥリアス王国ならびに同王国が拡大発展して成立したアストゥリアス・レオン王国（やがて単にレオン王国と呼ばれるようになった）の歴代国王による、レオン司教座聖堂への寄進文書をまとめたものである。レオンの町は、ローマ軍団の基地として生まれ、オルドーニョ 2 世（在位 914-924 年）が半島北部のオビエドから遷都を行い、以後、中世を通じてキリスト教圏の主要都市であり続けた。この写本にはレオン司教座聖堂にとって重要な寄進者の全頁大挿絵が含まれている。オルドーニョ 2 世像は 1969 年に本写本が盗難された際に残念ながら消失したが、オルドーニョ 3 世（在位 951-956 年）、ラミロ 3 世（在位 966-984 年）、ベルムード 2 世（在位 984-999 年）、アルフォンソ 5 世（在位 999-1028 年）、フェルナンド 1 世（在位 1037-1065 年）、アルフォンソ 6 世（在位 1065-1072 年）とサンチャ女伯を描いた挿絵が現存する。

国王たちが皆、封蝋付きの文書を手玉座に座るのに対して、最後の挿絵だけが異色で、サンチャ女伯が 1040 年に複数の村・修道院を含む多くの財産をレオン司教座聖堂へ寄進したことを恨みに思った甥のひとりに殺されたという伝説が表されている。男から刀を振るわれる彼女の姿が、殉教者を想起させるポーズで描かれる。男の横顔は、中世絵画ではしばしば「悪」を表す記号的表現である。この写本のファクシミリ版解説を手掛けたガルバン・フレイレは、アルフォンソ 9 世（在位 1188-1230 年）の時代にレオン司教を務めたマンリケ・デ・ラーラ（在任 1181-1205 年）が、レオン司教座聖堂の建設促進と地位向上のために個人的に作らせたものの、1205 年の彼の死によって未完に終わったと推定している。

参考文献・サイト

-Galván Freile, Fernando, *La decoración miniada en el Libro de las Estampas de la Catedral de León*, León, Universidad de León, 1997.

-Galván Freile, Fernando, “El *Libro de las Estampas* modelo para algunas de las vidrieras de la Catedral de León”, *Memoria ecclesiae*, 16 (2000), pp. 45-54.

- Wearing, Shannon L., “Holy Donors, Mighty Queens: Imaging Women in the Spanish Cathedral Cartularies of the Long Twelfth Century”, *Journal of Medieval History*, 42:1, 2016, pp. 76-106.

(K.J.)



『レオン司教座聖堂寄進文書集成』 f. 41v 「甥に殺されるサンチャ女伯」

3 『ブルゴスのサンティアゴ信徒会の書』

El Libro de la Cofradía de Santiago de Burgos

オリジナル写本制作年：1338年～17世紀

制作地：ブルゴス

所蔵先：ブルゴス司教座聖堂附属図書館, Ms. 1338

寸法、フォリオ数：375 × 285 mm, 73葉

ファクシミリ版出版地、出版者、出版年：Bilbao, La Gran Enciclopedia Vasca, 1977

所蔵先：福井千春氏旧蔵（現東京外国語大学久米研究室）

本写本は、ブルゴスのサンティアゴ信徒会の会員となった騎士たちの名前と紋章が記された一種の名簿である。騎士たちの紋章を挿絵化した、現存最古の「紋章集 armorial」といわれる。本書では、原則として1葉あたり4人の馬上の騎士が描かれる。1338年以降、17世紀まで書き継がれており、ここに記録された騎士たちの総数は300人以上にのぼる。もともとは馬上試合を行う際に、完全武装して兜で顔を覆うと観客が騎士を識別できないので、ひとりひとりの紋章の色や模様を工夫したのが起源とされる。その点で、日本の家紋とは異なる性格を持つ。しかし、同じ家門であれば部分的に共通の色や模様が用いられた。紋章のルールは、騎士道が発展した中世にヨーロッパ各地で徐々に整備され、精緻化を極めていった。

本写本は、当初、94葉あったとみられるが、16世紀後半に制作された部分が消失している。紋章のみならず、14世紀から17世紀に到る武具や馬具の変遷が一望できる点でも、きわめて重要な資料である。今回の展示品は、1970年代に刊行された貴重なオール・カラー・ファクシミリ版である。より精巧な印刷技術を用いた本写本のファクシミリ版が、2000年に出版されている。

参考文献・サイト

-*Libro de la Real Cofradía de los Caballeros del Santísimo y Santiago*, Burgos, Siloé, 2000.

-Menéndez Pidal de Navascues, Faustino (ed.), *El libro de la cofradía de Santiago de Burgos*, Bilbao, La Gran Enciclopedia Vasca, 1977.

(K.J.)

4 ゴンサロ・デ・ベルセオ『シロスの聖ドミニクス伝』

Gonzalo de Berceo, *Vida de Santo Domingo de Silos*

オリジナル写本制作年：13 世紀後半

制作地：サン・ミリャン・デ・ラ・コゴージャ修道院

所蔵先：サント・ドミンゴ・デ・シロス修道院図書館, Ms. 12

寸法、フォリオ数：410×295 mm, 21 葉

ファクシミリ版出版地、出版者、出版年：Burgos, Universidad de Burgos, 2000

所蔵先：福井千春氏旧蔵（現東京外国語大学久米研究室）

ゴンサロ・デ・ベルセオ（1198 頃-1264 年）は、現在のところカスティーリャ語文芸史上で名前が残っている最古の作者である。ラ・リオハ地方で生まれ育ち、そこで生涯のほぼすべてを送った。『サン・ミリャン註解』が書かれたサン・ミリャン・デ・ラ・コゴージャ修道院（レコンキスタの中で伝説化されたカスティーリャの守護聖人である聖ミリャンが 6 世紀に創設）で最初の教育を受けたベネディクト会系の在俗修道士で、後に公正証書作成係をつとめた。スペイン最古のパレンシア大学（1212 年頃の創立、現存せず）で自由学芸をおさめたと推測されている。後に「教養派文芸」と称されることとなった詩人たちの中でもっとも重要な詩人で、最重要作品である『聖母の奇跡』や、本展で展示している『シロスの聖ドミニクス伝』などの、聖人の生涯やキリスト教の教義を題材とした詩が残っている。

シロスの聖ドミニクス（1000-1073 年）はラ・リオハ地方に生まれ、サン・ミリャン・デ・ラ・コゴージャ修道院やサン・セバスティアン・デ・シロス修道院の修道院長を歴任した。奇跡を起こすという評判で生前から民衆から慕われ、死後は聖人として崇敬された。

教養派文芸（mester de clerecía）は直訳すると「聖職階級の文芸」で、ラテン語と自由学芸の教養を身につけた聖職者の詩人たちの作品を指す。フランス語の詩型アレクサンドランに基づいた「クアデルナ・ビア（cuaderna vía）」という 14 音節単韻×4 行の詩型を多用して自由学芸（特に修辞学）に基づいた寓意や比喻を用いるのを文体上の特徴とする。『わがシードの歌』の素朴な韻律と比較すると、韻律が発達したことがよくわかる。

教養派文芸の最大の特徴は、民衆の教化を目的として、ラテン語の宗教文献を俗語に翻案した作品を基本とすることである。読み書きができない民衆にうたい聞かせるために書かれたため、民衆のことばづかいが取り入れられ、日常生活への言及が豊富である。こうした配慮により、作品に生き生きとした描写力と素朴な魅力が生まれ、それと同時に作者の個性もあらわれる。

ベルセオが聖職者および詩人として生きた 13 世紀は中世ヨーロッパに新しい動きが生まれた時代だった。イベリア半島では、カスティーリャ王アルフォンソ 8 世（在位 1158-1214 年）率いるキリスト教連合軍がムワッヒド朝にレコンキスタで大勝、1230 年にはレオン王国とカスティーリャ王国が統合され、次いでレコンキスタの大進展期を迎えた。教会では、フランシスコ会やドミニコ会をはじめとする、後に托鉢修道会と総称される新形式の修道会が誕生した。従来の修道院は民衆から離れた場所に置かれ有力者からの寄進で富裕化していたが、托鉢修道会は生活様式を根本的にあらため、清貧を重視して信徒か

らの喜捨に頼った。自らの主任務を宣教だと認識し、修道院から外に出て、説教による宣教活動や慈善活動を精力的に行い、力をつけつつあった都市の市民階層に向けて宣教や知的活動を行った。彼らは各地の大学で神学教授に就任して権威集団を形成した。11世紀後半創立のポローニャ大学や12世紀創立のパリ大学をはじめとする大学の誕生も新時代を画する事象だった。大学の出現により、知的活動の中心がかつての修道院から都市に位置する大学へと移ったのである。

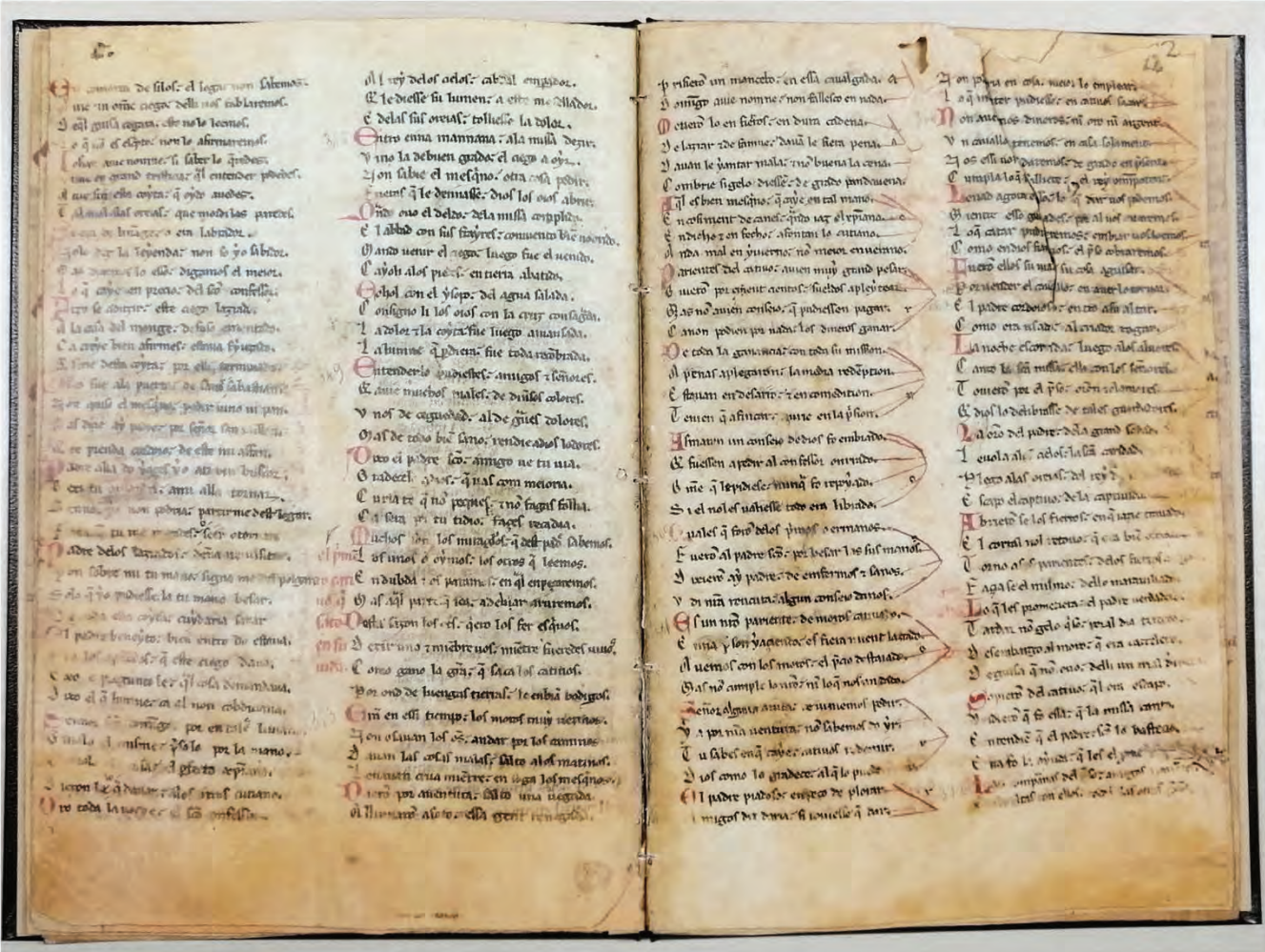
このような新しい潮流の中に、ベルセオをはじめとする教養派文芸の詩人たちの作品も位置づけられる。文芸の新しい地平を拓くという気概をベルセオたちが持っていたことは、下に示した『シロスの聖ドミニクス伝』冒頭部（展示箇所）第2連にあらわれている。

Quiero fer una prosa en román paladino, en cual suele el pueblo hablar con so vezino; ca non so tan letrado por fer otro latino. Bien valdrá, como creo, un vaso de bon vino.	私がつくりたいのは わかりやすい普段づかいのことばの詩 そのことばで人びとはふだん 自分の近所の人たちと話す 私はラテン語で詩をつくることのできるほどには ラテン語に堪能ではないのです (私の詩は) 美味しいブドウ酒の一杯には 値するだろうと私は思いますよ
--	---

参考文献・サイト

- ラベサ、ラファエル著（山田善郎監修、中岡省治、三好準之助訳）『スペイン語の歴史』昭和堂、2004年
- Berceo, Gonzalo de, *Vida de Santo Domingo de Silos*, edición de Teresa Labarta de Chaves, Madrid, Castalia, 2004 (1ª edición en 1972).
- Uria, Isabel, "Gonzalo de Berceo", en *Diccionario filológico de literatura medieval española. Textos y transmisión*, Madrid, Castalia, 2002, pp. 597-602.

(T.K.)



ゴンサロ・デ・ベルセオ『シロスの聖ドミニクス伝』

ベアトゥス写本

8世紀後半、イベリア半島北部のアストゥリアス王国内に位置したリエバナ修道院の修道士ベアトゥスが『ヨハネの黙示録』（以下、黙示録）の註解を編纂執筆した。黙示録は、新約聖書の末尾に配置された書で、旧約聖書冒頭の創世記に始まるこの世界の終わりが記されており、キリスト教世界で熱心に読まれてきた。ベアトゥスの註解は、教父時代から積み上げられてきた黙示録の文言のさまざまな解釈を寄せ集めたもので、おそらく彼自身が生きている間に挿絵が付けられた。この『ベアトゥス黙示録註解』の原本は失われたが、10～13世紀の作例を中心に、断簡を含めて35冊以上という数の写本が現存しており、総称として「ベアトゥス写本」と呼ばれている。個別の写本を指すときは「ベアトゥス写本〇〇本」という。

写本ごとに挿絵の様式や書体は異なるが、全体的傾向として、①独創的な色彩と造形感覚、②見開きを含む大型挿絵の多さ、③カロリング、ケルト、イスラーム、ペルシアなど地理的にも時代的にも広範にわたる美術からの影響が認められるといった特徴がある。

ベアトゥス写本は、古くから知られている作例の大半が10～11世紀のレオン・カスティーリャ地方に由来するため、中世スペインのキリスト教美術の代表作とみなされてきた。しかし、13世紀まで盛んに写されたことや、制作地がポルトガル、フランス、イタリアなど南欧全域に及ぶことが、近年の研究で分かってきた。この先、新発見があれば、ベアトゥス写本の制作と受容の全体像は、さらに変容していくだろう。

ベアトゥス写本のファクシミリ版について

関東では、慶應義塾大学、早稲田大学、立教大学、東京藝術大学などが複数のベアトゥス写本ファクシミリ版を所蔵している。

愛知県豊田市では、藤田秀明氏が個人で収集したファクシミリ版を「ライブラリーリエバナ」として2021年4月より無料で公開中である。管見の限り、日本国内でもっとも網羅的なベアトゥス写本ファクシミリ版のコレクションである。 Cf. ライブラリーリエバナ <https://syumei1.com/>

ベアトゥス写本全般の参考文献・サイト

-安發和彰「太陽をまとう女と龍—黙示録の宇宙的幻想—」『名画への旅 第3巻 中世II 天使が描いた』講談社、1993年

-毛塚実江子「『鳥と蛇の戦い—』—『ベアトゥス写本註解』に描かれたキリスト教動物寓意図像の考察」『美学』54(2004), 56-68頁

-田中久美子編『黙示録の美術』（ヨーロッパ中世美術論集2）竹林舎、2016年

ペーター・K.クライン「十世紀におけるベアトゥス写本挿絵の革新—終末への恐れ、イスラム勢力との抗争、典礼における活用という背景から—」、宮内ふじ乃「イメージを聞く—ベアトゥス写本の音と沈黙—」、安發和彰「バルカバード修道院のベアトゥス写本と「オビエドの十字架」装飾頁」所収

-辻佐保子「〈ベアトゥス〉黙示録註解書の挿絵に関する試論」『名古屋大学文学部研究論集』84(1982), 65-90頁（加筆再録『中世写本の彩飾と挿絵』岩波書店、1995年, 357-365頁）

-辻佐保子『ロマネスク美術とその周辺』、岩波書店、2007年

「『ベアトゥス黙示録註解』—『ファクンドゥス写本』の制作とその構成」、『『ベアトゥス黙示録』諸写本の系統別分類と主要作品の特色』、『『ベアトゥス黙示録註解』（『アローヨ写本』）解説』所収

-宮内ふじ乃「ベアトゥス写本におけるテキストとイメージ生成—黙示録8章1-5節の挿絵をめぐって」『西洋中世研究』3(2011), 4-21頁

-宮内ふじ乃「『夢と幻』—ベアトゥス写本の『ネブカドネツアル王の巨像の夢』をめぐって」、小峯和明編『〈予言文学〉の世界 過去と未来を繋ぐ言説』勉誠出版、2012年, 70-80頁

-エチェガライ、イニエスタ、ビバンコス、ジャルサ『ベアトゥス黙示録註解：ファクンドゥス写本』日本語版序文辻佐保子、大高保二郎・安發和彰訳、岩波書店、1998年

-辻佐保子、安發和彰、ミゲル・C.ビバンコス、ドゥルセ・オコーン『フランス国立図書館蔵本ファクシミリ版 ベアトゥス黙示録註解：アローヨ写本』岩波書店、2000年

-Williams, John, *The Illustrated Beatus: A Corpus of the Illustrations of the Commentary on the Apocalypse*, 5 vols., London, Harvey Miller, 1994-2003.

-Williams, John, (Martin, Therese (ed.)), *Visions of the End in Medieval Spain, Catalogue of Illustrated Beatus Commentaries on the Apocalypse and Study of the Geneva Beatus*, Amsterdam, Amsterdam University Press, 2017.

(K.J.)

5 リエバナのベアトゥス『黙示録註解』ウルジェイ本

Beatus Libanensis, *Commentarius in Apocalypsin*. Codex Urgellensis

ファクシミリ版リーフ

fols. 184v - 185 「最後の審判」(黙示録 20:11 - 15)

fol. 82v 「ノアの箱舟」(註解第 2 書第 8 節)

fol. 211 「海から来た 4 頭の獣と日の老いたる者」(ダニエル書 7:2 - 10)

オリジナル写本制作年：10 世紀第 4 四半期

制作地：不明

所蔵先：ラ・セウ・ドゥルジェイ司教座聖堂付属美術館、Inv. 501

寸法、フォリオ数：402×265mm, 232 葉

ファクシミリ版出版地、出版者、出版年：Madrid, Testimonio, 1997

所蔵先：東京外国語大学久米研究室

本写本は、12 世紀半ばにはすでにピレネー山中にあるラ・セウ・ドゥルジェイ司教座聖堂にあったことが知られている。しかし、その制作地をめぐっては、写本学、書体学、美術史学の観点から、レオン、ナバラ、ラ・リオハなど北スペインの東西にまたがる広範な地方が候補として挙げられてきた。制作地を絞る直接的な手がかりが写本の中に残されておらず、酷似した作例も見当たらないが、ベアトゥス写本第 II 群に分類されるグループの 10 世紀のまとまった作例として重要である。第 II 群基準作であるマギウス本の安定した作画と比較すると、こちらは、不安定だが自由な線描と、明るい色調に特徴がある。

展示リーフのうち、見開きの大型挿絵は『ヨハネの黙示録』第 20 章で語られる「最後の審判」を描いたものである。壁画や彫刻では、中央に裁きを下すキリスト、彼から見て右側に天国、左側に地獄が配される。しかしここでは、もっとも重要なモチーフであるキリストがのど(綴じ側)で断ち切られないよう、キリストと天上が左側に、地獄は右下に配置されている。

「ノアの箱舟」は、黙示録を典拠とする挿絵ではないが、ベアトゥスが編纂した註解テキストのなかで言及されるために挿入されている挿絵である。当時の動物観が垣間見える。

「海から来た 4 頭の獣と日の老いたる者」は、旧約聖書のうち黙示的性格の強い『ダニエル書』に基づく。ベアトゥス写本のうち相当数が、ヒエロニムスによる『ダニエル書註解』との合本になっている。世界の終わりに関する、当時の人々の強い関心が反映されていると言えるだろう。

参考文献・サイト

-Klein, Peter K., *Beatus de Liébana Codex Urgellensis : Kommentarband zur Faksimile-Ausgabe*, Madrid, Testimonio, 2001. = *Beatus de Liébana Codex Urgellensis : comentario a la edición facsímil*, Madrid, Testimonio, 2002.

(K.J.)



リエバナのベアトゥス『黙示録註解』ウルジェイ本 ff.184v-185 「最後の審判」 (黙示録20:11-15)

6 リエバナのベアトゥス『黙示録註解』バリャドリード本

Beatus Libanensis, *Commentarius in Apocalypsin*. Beato de la Universidad de Valladolid

ファクシミリ版リーフ

fol. 145v 「シオン山の礼拝」(黙示録 14:1 - 5)

オリジナル写本制作年：970年6月8日～9月8日

制作地：パレンシア、バルカバード修道院(?)

所蔵先：バリャドリード大学図書館、Ms. 433

寸法、フォリオ数：350×240 mm, 230 葉

ファクシミリ版出版地、出版者、出版年：Madrid, Testimonio, 2000

所蔵先：東京外国語大学久米研究室

別名「バルカバード本」と呼ばれる本写本は、一般的に、バルカバード修道院にあったベアトゥス写本だとみなされている。しかし、バルカバード修道院は、現在は完全な廃墟と化しており、関連史料もきわめて限られている。おそらくレオンを経由して、17世紀にはバリャドリードのサン・アンブローシオ学院にあり、現在はバリャドリード大学図書館の所蔵である。

写本自体に残された書き込みは以下のとおりである。まず、3葉裏の奥書には、イスパニア暦1008年(西暦970年)6月8日に制作が開始され、9月8日に完成したことが記されている。一方、2葉のラベリント型蔵書票と2葉裏の奥書から、修道院長センプロニウスが注文したことが分かる。2葉裏の奥書には、さらに、オベーコという人物が写字と彩飾の両方を担当した旨が書かれている。実際には、3か月という期間内にひとりで完成させることは難しかったに違いなく、オベーコは制作チームを率いる立場にあったと考えるのが自然だろう。彼らの出自は不明だが、他のベアトゥス写本、とりわけ10世紀半ばのマグウス本との類似性が高いため、レオン地方かその近辺で制作されたと考えられている。

展示リーフは、黙示録第14章の「シオン山の礼拝」を描いている。フォリオ全体の大型挿絵で、組紐文様の枠や、水平に色分けされた背景などは、10世紀のベアトゥス写本第IIグループと呼ばれる写本群に共通する特徴である。子羊が立つ山の両側に描かれた14名の人物は、黙示録本文で、豎琴を奏で、新しい歌を歌うとされる「14万4千人」を表している。床に直接腰を下ろし、片膝を立てて奏でる姿勢は、10世紀に最盛期を迎えていたイベリア半島南部の後ウマイヤ朝の宮廷文化を彷彿とさせる。画面上部は、さかさまの二連アーチで区切られ、「四つの生き物と長老たち」が描かれている。黙示録の四つの生き物は、福音書記者の象徴と重ねあわされている(トリノ本解説参照)。

参考文献・サイト

-*Beato de la Universidad de Valladolid*, Madrid: Testimonio Compañía Editorial, 2000.

-安發和彰「バルカバード修道院のベアトゥス写本と「オビエドの十字架」装飾頁」田中久美子編『黙示録の美術』(ヨーロッパ中世美術論集2)竹林舎、2016年、171-194頁 (K.J.)

7 リエバナのベアトゥス『黙示録註解』トリノ本

Beatus Libanensis, *Commentarius in Apocalypsin*. Beato de Turin

ファクシミリ版リーフ

fol. 96v「第1から第4の封印、四騎士」（黙示録 6:1 - 8）

オリジナル写本制作年：12世紀第1四半期

制作地：カタルーニャ、サンタ・マリア・デ・リポイ修道院（?）

所蔵先：トリノ、国立大学図書館、Sgn. I. II. 1

寸法、フォリオ数：372×296 mm, 223葉

ファクシミリ版出版地、出版者、出版年：Madrid, Testimonio, 2000

所蔵先：東京外国語大学久米研究室

本写本は、975年に制作されたベアトゥス写本ジローナ（ヘローナ）本を、12世紀のカタルーニャで写したものとみられる。ただし挿絵は12世紀風アレンジされている。11世紀のカタルーニャで作られた挿絵入り聖書本、とりわけ『リポイの聖書』（バチカン教皇庁図書館 Vat. Lat. 5729）と様式が酷似しているところから、サンタ・マリア・デ・リポイ修道院にジローナ本が運ばれて写されたか、あるいはリポイ修道院の写字生・挿絵師がジローナに呼ばれた可能性が高いだろうと、ベアトゥス写本総覧を執筆したウィリアムズは結論付けている。

サンタ・マリア・デ・リポイは、9世紀に創設されたベネディクト会修道院で、11世紀にウリバ（オリバ）修道院長（1008-1046年在位、1017年よりピク司教兼任）のもとで繁栄を迎えた。1047年の同修道院目録には246冊もの書物が記録されている。同修道院の写本制作室（スクリプトリウム）はその後もカタルーニャの中心的な存在であった。

展示リーフは『ヨハネの黙示録』第6章に基づく挿絵で、子羊が第1から第4の封印を開く場面である。白い馬の騎手は弓を、赤い馬の騎手は剣を（ここでは槍に見える）、黒い馬の騎手は秤を持つ。四番目に現れた青白い馬に乗るのは「死」であり、それに陰府（よみ）が従っている。四騎士の上部には「四つの生き物」が、獣頭人身かつ下半身が車輪という形で描かれている。人、獅子、牛、鷲がそれぞれマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書記者を象徴する。

参考文献・サイト

-Herrero Jiménez, Mauricio, *Beato de Turin*, Madrid, Testimonio, 2000.

(K.J.)



リエバナのベアトゥス『黙示録註解』
トリノ本 f.96v 「第1から第4の封印、四騎士」 (黙示録6:1-8)

8 リエバナのベアトゥス『黙示録註解』ラス・ウエルガス本

Beatus Libanensis, *Commentarius in Apocalypsin*. Beato de Las Huelgas

オリジナル写本制作年：1220年

制作地：ラス・ウエルガス修道院（ブルゴス）（?）、トレド（?）

所蔵先：ニューヨーク、ピアポント・モーガン図書館, Ms. 429

寸法、フォリオ数：530×340mm, 184葉

ファクシミリ版出版地、出版者、出版年：Valencia, Scriptorium, 2004

所蔵先：東京外国語大学附属図書館貴重図書室 P/193/732156

本写本には、奥書が二つ残されている。第一の奥書は、182葉裏にあり、970年に制作されたベアトゥス写本タバラス本（マドリード、国立歴史文書館, Cod. 1097B）の奥書のコピーである。タバラス本で名高い塔での写本制作風景の挿絵も、183葉裏に写されている。第二の奥書は184葉にあり、これによれば、本写本が作られたのは1220年9月だが、制作場所や制作者についての情報はない。実際の制作場所については、他の写本や壁画との比較から、ブルゴスあるいはトレドと推測されている。18世紀にはサンタ・マリア・デ・ラス・ウエルガス王立修道院にあったところから、「ラス・ウエルガス本」と呼ばれている。

ラス・ウエルガス修道院は、1187年にアルフォンソ8世（1158–1214年）と王妃エレアノールにより、ブルゴス近郊に創設されたシトー会の女子修道院である。カスティーリャ王家の女性たちとの縁が深く、同王国内の全シトー会女子修道院の中核として機能した。本作も何らかの形でカスティーリャ王家と関わりがあったと見られ、レオン王アルフォンソ9世の未亡人でカスティーリャ王フェルナンド3世の母ベレンゲラがラス・ウエルガス修道院へ贈った可能性や、フェルナンド3世と神聖ローマ帝国皇女ベアトリスの1219年の結婚を記念して制作された可能性などが検討されている。

本写本は、12世紀後半以降の後期ベアトゥス写本のグループに位置づけられる。とくにライランズ本、カルデーニャ本、アローヨ本とはさまざまな点で類似点を有している。たとえば、4冊とも、サイズが従来のベアトゥス写本より大きく、金銀が挿画・装飾にふんだんに用いられ、余白への書き込みが少ない。こうした特徴はいずれも、これら後期のベアトゥス写本が、修道院で修道士たちが自分たちのために制作したのではなく、王家の人間が注文して作らせた高価な贈答品であったことを伺わせる。

参考文献・サイト

-安發和彰「後期ベアトゥス写本グループにおけるアローヨ写本の位置」『フランス国立図書館蔵本ファクシミリ版 ベアトゥス黙示録註解 アローヨ写本』岩波書店、2000年、23-27頁

-*Beato del Monasterio de Santa María la Real de Huelgas de Burgos. Estudio del Manuscrito del Beato de Las Huelgas, M. 429*, Valencia, 2004.

(K.J.)